

特色ある学校

グローバル化に対応する工業教育を目指して —海外インターンシップの試み—

岐阜県立多治見工業高等学校長 小川 恵一

1. はじめに

本校は、明治31年、室町時代から美濃焼づくりとして歴史ある地に、当時は日本の外貨獲得を目指す主要産業の一つであった窯業界の近代化と、更なる「美濃焼」の技術向上を目指し、東京工業学校の窯業科をモデルに開設された、岐阜県陶磁器講習所から数えて117年となる工業高校である。この間、学校の所在地ならびに名称が幾度となく変更されたが、文化勲章受章者、日本芸術院会員、国の無形文化財保持者（人間国宝）らを多く輩出し、地域産業の担い手育成に留まらず、日本の芸術文化の発展にも大きく寄与してきた。

現名称、岐阜県立多治見工業高等学校となった昭和23年の新制高校校長は、民間窯業会社社長の兼務であった。



正門から見た本校

窯業単科から現在は、セラミック科、デザイン科、電子機械科、電気システム科の4学科5クラスであるが、新年度からは電子機械科がクラス減となり1学年4クラスとなる。また、高卒以上の入学資格で2年間陶芸に関して専門的に学ぶことができる専攻科（陶磁科学芸術科）も設置されている。進路は、市が愛知県に隣接していることから求人も多く、7割が就職している。

2. 本校の指導の力点

本校は、「正しく、強く、明るく」の校訓を体し、豊かな人間性と創造性に富む実践力のある人材の育成に努めている。学習面においては基礎・基本の定着はもちろんのこと、全ての教科において言語能力やコミュニケーション能力を高める指導を進めている。教員は『IQE研修（Improvement Quality of Education）』と称して、授業改善に繋がる校内研修を数年来続けて指導向上に努めている。生活指導面においては、身だしなみや挨拶、規範意識の高揚などに努めており、学校訪問される企業の方々や近隣の方々からの評判もよい。進路指導においては、組織的なキャリア教育を推進しており、就職予定者全員のインターンシップはもちろん、進路相談会や各種対策試験の充実を図っている。特徴的

な取組としては、コミュニケーション能力向上のために自分の名刺を持たせての地元企業展見学、グローバル化に対応できる人材育成としての海外インターンシップ等がある。今回、海外インターンシップについて紹介したい。

3. 海外インターンシップの試み

平成23年、地元商工会会頭で、本校生が毎年就職でお世話になっている(株)TYKの会長さんから「最近、海外工場で高専の生徒をインターンシップさせている。」とお話を聞き、これからの工業高校はグローバル化に対応すべきと、岐阜県初の試みを前校長が決断され、会長さんに本校生の体験を依頼したことから始まった。

対象は2年生2名。誰でも積極的に応募できるように、生徒費用は育友会に、引率教員費用は同窓会に支援を依頼した。県教育委員会とも協議を重ねたが、育友会主催の本校独自行事とした。

第1回の実施期間は、平成24年8月19日(日)から26日(土)までの1週間。このうち、3日間を(株)TYK台湾高雄工場にて2名の男子生徒が体験した。お世話いただく(株)TYKには、イギリス工場もあり、高専の生徒はイギリスを利用しているが、費用面から本校は台湾限定とした。

就業体験以外の日は、台湾観光も兼ねたコミュニケーションの研修期間である。引率教師は見守り役に徹するので、生徒自ら台湾新幹線の



耐火物製造体験中(平成25年)

キップ購入から食事の注文まで四苦八苦の研修である。英語が苦手な生徒であっても、台湾は日本人に友好的であり、漢字の筆談でも意思を伝えられるので「挑戦し、大きくなれ」と願って見守るのである。この貴重な経験を全校生徒に報告する機会も2月に設けた。

第2回の実施は、平成25年8月4日(日)から10日(土)までの1週間。前年、大型の台風が台湾を直撃し、往復の航空便運航に気をもんだため、実施期間を早めることにした。参加生徒は女子1名、男子1名であった。第1回は見学が多かったが、今回は、台湾工場の女性従業員にしっかりと耐火物製造の実務指導を受けた。

4. 今年度の海外インターンシップ

今年度は、3回目の実施となった。期間は、平成26年8月3日(日)から9日(土)までの1週間。セラミック科の女子生徒1名と電気システム科の男子生徒1名が参加した。引率教員も国際化に対応すべく今後の指導力の向上にと、若手から中堅クラスの人材を順次あてている。

現地で担当していただくのは、台湾高雄工場のGMIにあたる台湾人の総経理の方と、日本人の工場長である。ちなみに工場長は本校の卒業生であり、時に厳しく時に暖かく、後輩を導いてくださっている。

3回目ともなると、学校の対応にもゆとりが生まれ、今回は事前研修を充実させている。ま



台湾高雄工場玄関(平成25年)



引率教員とともに事前研修

ず、6月初旬に多治見市内の(株)TYK本社を生徒と引率教員、窓口となっている進路指導部長、校長が訪問し、会長さん始め会社の担当者への挨拶の他、生徒からは抱負を語らせた。

6月下旬から7月下旬にかけては、前年度の体験生徒からのアドバイスの時間を設けたり、会社内容の研修会、挨拶や自己紹介が簡単な中国語でできるような学習会も開いた。

8月3日、学校に集合し、6時に出発。中部国際空港10時離陸、現地時間で12時に着陸。入国審査前に体温チェックがあり、台湾銀行にて両替も済ませた。一人一人の審査では、男子生徒は言葉が通じず長時間苦戦となった。バスのキップ購入、移動、新幹線のキップ購入、移動と続く。新幹線は自由席を購入し、始めは「博愛座」という席に座ってしまった。いわゆる日本の弱者のための優先席と後で気付く。高雄市内の目的駅到着後、台湾高雄工場長と面会。「台



自販機によるキップ購入



朝のラジオ体操

湾は人よりも車の走行が優先」などのアドバイスと地下鉄の乗り方のレクチャーを受けた。4日から6日までは高雄市のホテルに宿泊し、工場までは地下鉄通勤が始まった。工場の朝は、日本のラジオ体操で始まる。ここでいいところを見せようと「皆さんの前でやらせてください。」と申し出たのはよかったが、始めてみると第2体操の音が流れ、第1体操に慣れきっていた2人は満足にできず、翌日のリベンジとなった。第1と第2は、交互に実施しているそうである。総経理との面会や、従業員の方々への挨拶の後、就業体験となった。

今年は暑く、文科系部活動所属の元々体力のない2人には過酷とも言えたが、材料強度試験や耐火物製造など現地の方に身振り手振りで指導を受け、暖かく見守られた充実した3日間となった。過去2回は、硬式野球部員などの体力のある生徒が参加しており、気にはならなかつ



地下鉄で帰る疲れ切った生徒



女性従業員から指導を受ける

たが、次年度の参加希望者が文科系部員であれば事前研修に体力作りも必要と感じた。

7日から9日は、台北のホテルに滞在し、台北市内の観光研修を行った。生徒の疲れ切った表情から、少しの自信とようやく笑顔が感じられるようになった。

最終日は台風11号が四国に接近中、帰国便の発着が心配となった。予定便は何とか離陸。次の便は欠航となったため、冷や汗の台湾出発である。ところが、強風で中部国際空港に着陸できず、羽田へ迂回となってしまった。羽田からは、必死の乗り継ぎで、新幹線を利用し、名古屋からも電車で多治見駅に到着したのは10日の0時半であった。校長始め、迎える職員も電話連絡を取りながらも右往左往した大変な帰国となった。しかし、これも生徒にとっては貴重な経験。わずか1週間で生徒は随分逞しくなった。引率教員が、羽田からの乗り継ぎ時刻を



学校と同じアムスラー型強度試験機



台北市内の観光研修中

悲壮な思いで調べていても、「先生、大丈夫ですよ。」と逆に声を掛けられるほどの余裕も生まれたのである。行きでは、忘れ物や暑さ、現地の方に言葉が通じないことなど、常に疲れた表情を見せていた生徒とは思えないほど、自信に満ちていたと引率者も苦笑したそうである。

5. おわりに

本校では、教育課程の見直しも行っている。平成27年度入学生からは、従来3年生で選択制としていた英語を全員履修とした。グローバル化に備えるためには、当然と考える。専門教科に重きを置いていたカリキュラムから、バランスの取れた工業人育成へと舵を切り、全ての学科で3年生まで、国語、数学、理科、社会、英語を各学年最低でも2単位以上履修へと変更したのである。

この稿が工業教育資料に掲載される頃には、生徒2人による海外インターンシップ校内報告会を終えているが、報告会においても是非多くの生徒に海外へ興味を持ってもらい、次の学年には積極的に応募してもらいたい。本校の方式は、非常にコンパクトな取組であり、他の学校でも始めやすい方式であると考えている。

このような独自の取組ができるのは、(株)TYK様、育友会、同窓会のご理解と多大なるご支援のおかげである。深く感謝申し上げたい。